



直木賞作家

# 門井慶喜

—— 気付いたら15年。

溶け込みやすい街です——

芥川賞作家

# 又吉直樹

—— 寝屋川の堤防、

ネタ考えながら走りました——



## ～こんな時だから **本** を読もう～ ねやがわPR大使

ねやがわPR大使に就任した、寝屋川市在住で直木賞作家の門井慶喜さんと市出身で芥川賞作家の又吉直樹さん。日本を代表する作家のお二人に、就任の抱負やお互いの作家活動、寝屋川市への思いを語っていただきました。

——まずPR大使に就任された感想、意気込みを伺います。

**又吉さん** 私は18歳までこの街に住んでいたので好きな街ですし、

PRできるのはすごくうれしい。寝屋川市を離れて割と長く、まずいろいろ知っていかないとダメだなと思います。

—— どのところが好きですか？

**又吉さん** 最初に見た街はたぶんここ（寝屋川市）やったと思います。サッカーの練習をしていた公園だったり、学校だったり。小学校（啓明）のときは淀川の河川敷を走っていて、中学校（第五）では寝屋川の川沿いの道を萱島まで毎日走っていました。自宅から割と速いペースで35分くらい。気持ちいいです。走りながらネタなどいろんなことを考えていました。

**門井さん** ジョギングを始めて3か月になります。淀川の河川公園を走っていますが、確かに気持ちいいですね。私は走るのが嫌いなんです。あそこ（河川公園）だったら走ってもいいなあ（笑）。ちょっと川風が寒く、向かい風はつらいですが。

私は又吉さんとは逆で、よそで生まれて大人になってから寝屋川に住むようになりました。たまた

ま奥さんが出身だった  
ということから、あまり  
意識しなくて気が付いたらも  
う15年間も過ごして、すこ  
く溶け込みやすい街かなと思  
います。

——寝屋川市にゆかりのある作  
家ですが、お互いの認識はあり  
ましたか。

**又吉さん** これまで3回ぐらい  
お会いしましたね。

——とある番組では、寝屋川ト  
ークを繰り広げられたとか。

**門井さん** 僕が直木賞をもらっ  
たときに「タイプライターズ」と  
いうテレビのバラエティ番組で初  
めてお会いしました。ロケバスの  
中で「寝屋川ですか?」「寝屋川  
ですよ!」と寝屋川トークを始め  
たのです(笑)。バスに居た加藤  
シゲアキさんに2人で「寝屋川は  
こういうところだよ」と教えてあ  
げました。それだけでも市長賞も  
らっていいぐらいです(笑)。

**又吉さん** そう、PRしました  
ね(笑)。

**門井さん** ありがとうございます  
す。面白いですね。一般的な読  
書教育とは違いますが、結果的に  
又吉さんのような方になれるわ  
けですから。お父さんは自分の読  
解力に自信があったのですか。

**又吉さん** いいえ。本当に僕から  
本を取って読み上げ、「意味分かっ  
ているのか。こんな訳分からんも  
のを分かるわけないやろ。お前に」  
と。僕が背伸びをしていると思っ  
たのでしょう。その本はゲーテの  
詩集でしたが(笑)。

——お父さんなりの「コミュニケー  
ション」だったのでは。

**又吉さん** まあ、そうですね。愛  
情を感じていたので嫌がらせとは  
思っていません。そういうお互い  
に愛情はあるけれど  
分かり合



——今年になって書店でもお会  
いになったとか。

**門井さん** そうですね。新宿の  
紀伊国屋書店でトークショーを  
行ったとき、隣の控室から又吉  
さんの声がしてきて、ご本人だっ  
たので挨拶をしました。全くの  
偶然です。

——お互いの作品で印象に残っ  
たことはありますか。

**又吉さん** 「銀河鉄道の父」です  
ね。私は昔から父親と子どもに関  
係性の話が好きですが、私が知っ  
ていた宮沢賢治像が違っていたま  
したし、お父さん(の政次郎)も  
こういう方だったんだというの  
がよく分かりました。特に妹(の  
トシ)が亡くなったシーンで、お

えないものが、創作の話になると  
よく出てくると思います。

——ありがとうございます。門井  
さんはどうですか。

**門井さん** 「火花」ですね。長編  
小説の場合、主人公と副主人公が  
いて、その2人の関係が最初から  
最後まで同じだったらつまらない  
わけです。どんなジャンルでも、「火  
花」は)最初は主人公が先輩の芸  
人をめっちゃ尊敬するのです  
が、付き合っていくうちに尊敬が  
少しずつ変わっていく、最後は軽  
蔑とはちよつと違いますが、しよつ  
がないとなっていく。口で言うとな  
単ですが、長編の時間の流れの中  
で読者が不自然に思わないように  
変えていくのはすごく難しい。自  
然に流れるように進む感じとい  
うのは純粹に技術的に見て、すこ  
いというか、やられたというか、ちよつ  
とジェラシーを感じました。

——門井さんは初めて全部読んだ  
のが辞典だったということだ  
が、父親の影響はありましたか。

**門井さん** 僕は又吉さんとは逆

父さんと賢治が本当は話していな  
いだろうという会話を門井さんの  
想像で書くじゃないですか。僕は  
このシーンにぐつとききました。何  
かそこから感じたことを言語化す  
る職業の創作者だったら書くよな  
と。(賢治は) 詩人でもあり、な  
るほどと納得し、こういう親子の  
軋轢(あつれき)は生まれるだろ  
うというところを面白く読みまし  
た。

うちは父親が本を一切読みませ

ん。中学校のときに本を読んでいた  
ら、父に「お前、意味も分からんく  
せに格好つけてそんなもん読むな」  
と言われました(笑)。本を取り上  
げて自分なりの解釈を述べ、僕が  
「ほーっ」と言う、そういう関係な  
んです。僕は隠れて本を読んでいま  
したが、父親はいじめようとしてい  
るのではなく、古いタイプの人間な  
ので、もつと活発にとくりに思っ  
ていたのでしょう。そんなことを思  
い出したりして面白かったです。



しも最後まで読まなくていいもの  
だと分かりました。ゲーテ詩集は  
読みませんでした。シャーロッ  
クホームズは分かりやすくって読ん  
でいました。

——寝屋川市の可能性や期待を聞  
かせてください。

**又吉さん** せっかく僕と門井さ  
んがPR大使をやらせてもらうの  
で、本を好きな人がほかの街より  
多くなるとうれしいです。「なぜ

僕は生まれ育った、このまちが大好きです。子どものころのエッセイなどを書く場合は、このまちで育った経験がかなり影響を与えていると思います。このまちとの関係は私にとって切れないものです。これから寝屋川市をどんどん発信していきたいと思っています。



**又吉 直樹さん**  
(お笑い芸人・芥川賞作家)  
昭和55年6月2日生まれ

寝屋川市生まれ。高校を卒業するまで、市内に在住。上京後は吉本興業に所属し、平成15年お笑いコンビ「ピース」結成。平成27年に『火花』で第153回芥川賞を受賞。その他『劇場』『人間』などを執筆するなど作家としても活躍する、市出身のお笑い芸人。



直木賞を受賞した「銀河鉄道の父」は、宮沢賢治の父親を描いた作品ですが、私が父親として子育てをしたのは、大半がこのまちなので、その経験が作品に影響していると思います。歴史作家として寝屋川市を伝えていけたらと思っています。



**門井 慶喜さん**  
(直木賞作家)  
昭和46年11月2日生まれ

同志社大学文学部卒業。平成15年オール讀物推理小説新人賞を「キッドナッパーズ」で受賞しデビュー。平成30年に「銀河鉄道の父」で第158回直木賞を受賞。平成17年に寝屋川市に転居してからは、市内を執筆活動拠点に活躍する小説家。

## 私のように市外から来て住み着いた人も魅力を感じられる街です。

【門井】

**門井さん** それは寝屋川を舞台にということですか(笑)。これまで(徳川)家康とか東京の話が多く、意外と関西に住んでいながら関西を舞台にした歴史ものはほとんど書いていないので多少反省しています。書きたいし書くべきだと思っています。

——新型コロナウィルスの感染拡大で子どもたちは外で遊べない日が続いていますが、こんなときの過ごし方やメッセージがあれば。  
**門井さん** こんなときにこそ本を読んでもいいですね。僕の作品を読んでほしいとかではありません。本はすごいとかがありません。

く簡単に手軽なツールなんです。本を読んで過剰なということ、全人類を襲う新たな病気に対する私たちの文化的な抵抗ではないかと思っています。  
**又吉さん** 本を読むことで日常が楽しくなります。すごく退屈なときはサッカーのフォーメーションを近代文学の作家で作っています(笑)。太宰治と芥川龍之介を2トップにし、井伏鱒二を入れると全体のバランスが良いか。サイドにテクニシャンの安部公房を置き、泉鏡花を後半から投入するというふう。こんな遊びをしているとすぐ時間がたちます。



淀川河川公園

が多い」くらいいいのですが(笑)  
**門井さん** 私は3人の子供もいますが、小学生は割と本を読むのですが、中学生くらいになるとパタッと止まってしまうのです。部活などで忙しいのは分かりますが、せっかく身に付いた読書習慣が途絶えるのはもったいない。学校と家庭の両面から何かつなぐことができる方法がないかと思っています。  
**又吉さん** 確かに中学生くらいになると遊ぶことも多く、部活をやり出すと読む時間がないですね。  
**門井さん** それは分かるのですが、読書への興味が途絶えないよ

## 淀川の河川敷を走ったことなど、思い出がたくさんあります。

【又吉】

うな方法や場など何かあればいいと思います。  
——こうしたら読書が好きになるというような秘訣はありますか。  
**又吉さん** いろんな読書体験というか、「わあ〜」みたいな瞬間とかがたまにあつて…。読み始めた頃はそんなことが多かったように思います。そのようなことをどんどんやっていくと本と自分の信頼関係が結ばれていく。それを何回か経験すると本を読みたくなくなり、その手前で終わると眠たいなあとか、退屈やなあというところで止まってしまう。それ、どうしたらいいんでしょうね(笑)。人によりますよね。僕みたいに「何、格好つけているんや」と言われたから読んでいたかもしれないし、言われたら読まなくなる人もいます

しょうし。  
**門井さん** もともと人間の本能に「本を読む」という行動はプログラムされていないのです。「物を投げろ」とか「走る」とか人間の生存のために必須の行動は元々ありません。本が常に身近なところにはありません。暇なときに何でもいから手に取ってパラパラと読んでみるという環境があるだけでも随分違うと思います。例えば、小・中学校なら図書室が玄関口やホールのすぐ横にあるとか、四六時中開け放しにするなど具体的にアクセスしやすくする。大人が「こんな本がいいですよ」「こんな物語はいいですよ」と言うよりも、はるかに読書人口を増やす手段になると思っています。  
**又吉さん** 確かに本との距離が大

切ですね。背表紙を見ているだけで「何やろう」と手に取ることもあるかもしれない。  
**門井さん** 全くそうです。我々でも最後まで読んだ本より、帯やタイトルしか見ていない本の方がはるかに多いはず。子どもも当然そうであつていいし、それが正しい本と人との関係です。  
——1か月にどれだけ本を読みま  
**又吉さん** 仕事の関係で10冊くらいですかね。長編ばかりではありませんが。  
**門井さん** 歴史小説ものなので、いろいろな資料をそろえ、あつちこつちをちよつと読むというよう  
なことがあり、何冊という数え方がしにくいです。  
——今後、書いてみたい作品は。  
**又吉さん** いっぱいありますが、少年の話ですね。これまで小説は3冊書きましたが、今度は、自分の実人生からだいぶ距離をとって書いてみようかなと思います。その中で自分が出てくるかもしれませんが。